街かど gallery

立花町山崎
牛嶋　英子

一度は習ってみたいと思っていた水墨画。公民館で講座があることを知り喜んで参加して勉強するチャンスに恵まれました。

中島美代子先生から初心者にも分かりやすく丁寧に指導をしていただきました。水墨画の一筆濃淡で描く線のむずかしさ奥深さを知りました。

子どもの頃から絵を描くことに夢中になっていましたが年を重ねて出来るとは思いもしませんでした。サークルの友だちとの交流もすばらしく楽しい時を過ごすことができます。

まだまだ思うように描けませんが、楽しく続けていきたいと願っています。

八女市立福島中学校一年

古川萌さんの 坂本繁二郎先生の『馬』模写画について

11月３日に坂本繁二郎先生の画業を讃える「帰居祭」が催される。そのポスター作製の依頼にこたえるために、坂本先生の絵をクレパスで古川萌さんに模写してもらった。

原画は昭和29年、先生が72才のときの『馬』である。同年５月９日号の『週間朝日』の表紙を飾った作品でもある。

萌さんにとって、久しぶりのクレパス使用が意外にも興味しんしんに見えた。学校の「夏休み」まで、奇しくも先生の忌日の７月14日に着手して、８月いっぱいで完成した。

萌さんが描いては削り、削っては色を重ねる模写に楽しそうに挑戦して、原画のもつ複雑極まる色調に気づいてくれたことが、指導する当方にとって何よりも嬉しいことだった。坂本先生が一番お好きだった季節は夏だったとか。今年の酷暑に耐えた萌さんに拍手をおくりたい。

（杉山絵の教室　**杉山　亜土**）

杉山洋指導『**紅彩会展**』　11月12日～17日。
おりなす八女「ギャラリーA」にて開催。

94歳まだまだ元気です

安達　格一

私の仕立て人生は18歳の時福島のカミヤ洋服店に就職した時がスタートです。7年間の軍隊生活の後中国から帰国して修行の後、28歳でアダチ洋服店を開店しました。その後テーラーアダチとして66年この道一筋を歩いてきました。昭和30年代の最盛期には八女市内に12~13軒の紳士服の仕立専門店があったと思いますが私の知る限り現在では八女に3軒位になりました。当時私の店では10名の職人が働いていました。紳士服の業界はオーダーからイージーオーダー、既製服、量販店と次第に変化していきました。私は一級洋服技能士、ＦＩＭＴデザイナー認定の技術有資格者というプライドから誂えにこだわってきましたが、時代の流れには逆らえず、頭を切り替えて洋服のリフォーム（補正、修理等）に転換しました。高度経済成長期は大量生産、使い捨ての風潮がありましたが、お気に入りの服をリフォームして長く楽しむ、これが本来の姿ではないでしょうか。今は7時頃起床して乾布摩擦、足揉みをして身体をほぐし、朝食後仕事場へ出ます。もともと好きな仕事ですから、仕事が苦になることは一度もありません。酒は昔からやりません。タバコは60歳頃まで1日20~30本吸っていました。家内に禁煙を言われてもやめられずにいましたが、ある日孫娘から「おじいちゃん、タバコを吸うとガンになるよ」と言われてピタリとやめました。家内からは私が何度お願いしてもやめなかったのにと言われました。80歳を過ぎて二度大きな試練を受けました。80歳の時脳血栓で緊急入院しましたが一週間で退院でき、以後血圧は正常を保っています。87歳の時長く連れ添った妻を亡くしました。苦楽を共にした糟糖の妻でしたから大ショックでした。なかなか気持ちの整理がつかず、立ち直るのに約一年かかりました。今は一日のリズムもできて充実した毎日です。針の糸通しは脳を活性化させてくれるようです。糸かがりは手のリハビリ、足踏みミシンは足のトレーニングになっています。幾つになっても自分の仕事をとおして少しでも人様のお役に立てることは大きな生き甲斐です。作業台の上に仕事に使う年代ものの鋳物の羊の重しがある。安達さんは大正8年の未（ひつじ）年生まれ。ウールを相手にテーラー一代の偉大な人生。子どもは国の宝というが、安達さんのようなお年寄りもまた八女の財産である。

長年安達さんの仕事を見てきたシープの重し

健康万歳 ④

健康寿命を延ばそう

年金支給年齢の65歳を一応の線引きとして定年制をこの当たりに設定している処が多いが、長寿社会が定着し、これだけ平均寿命が伸びてくると、年金支給年齢も定年制度も共に成長しなければ国の財政はそのうち破綻せざるを得ず、福祉目的税（消費税）を10％にしたとて一時凌ぎに過ぎまい。

現今、平均寿命が急速に伸びて男性79歳、女性87歳になったが、健康寿命との間には男性で3歳、女性で7歳もの開きがある。言い換えればこの間は介護が必要ということだ。高齢者人口は約3,000万人、そのうち介護を要する人が560万人位いると言われている。

人間は年老いると気力体力ともに衰えるのは当たり前で、特別な病気がなくても動脈硬化による血流の低下を来たし、運動機能低下（腰痛、肩こり、関節痛など）による症状のほか、視力障害、難聴、便秘、尿漏れ、不眠、物忘れなどは当然で、明らかに高齢によると思われる「老年症候群」と仲良く付き合うのも大切になる。

若い頃の生活不摂生、特に運動や食生活、ストレス、喫煙習慣、過度の飲酒などの悪癖が大きな原因であれば、本人の自業自得と諦めざるを得ない。これに転倒骨折など加わるとＡＤＬ（日常生活活動度）が低下し治療と介護の両面が必要となってくる。症状が高じ寝たきりにでもなると認知症を誘発し、充分なコミュニケーションも取れず意思疎通もままならず生活周辺が狭くなってくる。

しかし一方では元気に働いて、余暇はサークル活動（ゲートボール、グランドゴルフ）や、グループ旅行などと「時間の流れ」を上手に利用し、結構充実した生活を楽しんでおられる同年齢層の人が遥かに多いことも事実だ。

流行語となった「アンチエイジング」には教養と教育が必要、つまり「（今日用）事があること、（今日行く）所があること」極言すればこれが老年症候群と呼ばれる暗いイメージの老人と、元気な老人を分けるキーワードになる。

林　榮一
（医師・八女市立花町）

咲き 節ばあちゃん

節さんは友人の今は亡き姑である。

戦中戦後を生きた節さんの人生は、澄まし顔の遺影からは想像できない、情念の火を静かに燃やし続けたドラマを秘めていた。

節さんの嫁ぎ先は手広く事業を展開する家だった。昭和16年長男にも恵まれ幸せの絶頂期に夫を戦地に送り出した。

終戦を目前に病に倒れた節さんの夫が戦地より送られた先は、野多目の福岡第二陸軍病院である。節さんは幼い長男を連れ、はるばる茨城から四日かけて野多目に駆け付けた。

節さんの祈りも虚しく夫は帰らぬ人となり、異郷の地で幼子と二人で節さんは夫を荼毘に附した。節さん25の時である。

その後、縁あって長男を連れて再婚した節さん。再婚せざるを得なかったのかもしれない。父親違いの子供たちを育てる苦労は有ったものの、長男を大学まで出してくれた二度目の夫に深く感謝し、良く仕えた節さん。

平成二年節さんは献身的な介護の末に夫を看取った。二度目の夫の納骨を済ませると、節さんは言った。

野多目につれて行って欲しいと。長男を立派に育ててくれた人が生きている間は封印してきた前夫への思いを、節さんは堰を切ったように語った。初めて男女の契りを交わした人への思いの火種を、節さんは半世紀の間その胸に温め続けてきたのであろうか。

健気で一途で愛おしい節さん。こんな女性が生きていた時代がどんどん遠くなる。

（夏生）